

# 日本性科学会 ニュース

第24卷第1号

平成17年(2005年)3月

発行人:野末 源一 印刷所:株式会社

## 第34回 性治療研修会

日 時 5月22日(日) 9:30~16:45  
場 所 東京慈恵会医科大学西新橋キャンパス大学1号館5階講堂

### 研修会プログラム

9:30~9:35	開催の挨拶	日本性科学会理事長	野末 源一
9:35~10:20	性欲低下障害の周辺	あべメンタルクリニック院長	阿部 輝夫
10:20~11:05	ホルモン補充療法の今	東京医科歯科大学周産・女性診療科助手	尾林 聰
11:05~11:40	女性の前立腺	千葉大学大学院医学研究科形態形成学講座教授	年森 清隆
11:40~12:00	バッシングに揺れる学校性教育の課題とすすめ方	千葉大学名誉教授	武田 敏
	(昼休みに新しい性教育ビデオ上映)		
12:00~13:50	昼休み(13:15~13:45 日本性科学会総会)		
13:50~14:30	セクシュアルヘルスの推進	千葉医療センター産婦人科医長	大川 玲子
14:30~15:00	性機能障害の行動療法	日赤医療センター臨床心理士	金子 和子
15:00~15:10	休憩		
15:10~16:40	グループワーク	さいたま社会保険病院精神神経科部長	塚田 攻
16:40~16:45	閉会の挨拶	日本性科学会副理事長	阿部 輝夫

## 第25回 日本性科学学会のお知らせ

第25回日本性科学学会・第7回性科学セミナーを下記のとおり予定しております。皆様奮って御参加下さいますようご案内申し上げます。

会 期 2005年11月5日(土)午後 第7回性科学セミナー  
11月6日(日)第25回 日本性科学学会 学術集会  
場 所 東京医科歯科大学 講堂・セミナー室  
学 会 長 麻生 武志(東京医科歯科大学 周産・女性診療科教授)  
メインテーマ 「性科学の現状と展望」

第25回 日本性科学学会 学術集会 プログラム予定  
2名の方に、性科学の基礎と臨床に関連した特別講演をお願いします。  
特別講演1 「女性の性的反応に関する新しい概念」(仮題)  
Professor Rosemary Basson M. D. Ph. D. (Canada)  
British Columbia Center for Sexuality, Department of Psychiatry & Gynecology  
特別講演2 「射精障害の基礎・臨床における新しいアプローチ」(仮題)  
Professor Peter Lim Haut Chye M. D. Ph. D. (Singapore)  
Medical Director, Urology Centre, Gleneagles Hospital,  
Sr Visiting Consultant & Advisor, Dept of Urology, CGH, Singapore  
Adjunct Professor, Edith Cowan University, Australia  
そのほか一般演題発表・シンポジウム・ワークショップ等を行う予定です。

一般演題申込締切 2005年7月22日(金)  
400字以内の演題要旨をe-mailにて下記宛にお送りください

e-mail address: s.obayashi.gyne@tmd.ac.jp

一般演題は全てパソコンプロジェクターを使った口演のみといたします。

お問い合わせ先 〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45  
東京医科歯科大学 周産・女性診療科 担当: 尾林 聰  
電話: 03-5803-5322 Fax: 03-5803-0148

Vol. 24

日本性科学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

No.

1

## 挿入障害（ワギニスムス）の症例

—— 婦人科・産婦人科との連携 ——

日本性科学会カウンセリング室 渡辺景子

### 〈はじめに〉

当室では、女性からの相談の中で、挿入障害（ワギニスムス）の相談が最も多い。挿入障害の患者にとり、婦人科・産婦人科との連携は極めて重要である。今回、ケースを通してこの問題について考えてみた。

### 〈ケースの紹介〉

Y子は31歳、Y男は32歳で共に会社員、結婚歴2年のカップルである。来室までの経過は次のようにある。2人は恋愛し、3年間の交際の後結婚した。交際期間中から月1回程度の性交渉を試みるが、Y子は挿入時、痛い・恐い・力が入るとの理由でペニスの挿入ができない。結婚後も状況は変わらず、特にY子の挙児希望が強まった為、当室のことを調べて来室に至った。

### 〈治療の経過〉

初回2人で来室した。Y子は緊張気味、一方Y男は穏やかで淡々とした印象であり、上記の経過と主訴について主にY子が語った。主訴は「挿入ができない（未完成婚）・子どもが欲しい」ということであった。これまで婦人科の受診歴はないという。2人は継続的なカウンセリングを希望し、また治療者のすすめた性を専門とする医師のいる日赤医療センターでの身体チェックも希望し、予約をとった。治療者は他の性治療と同じく、自律訓練や自宅での段階的な性的練習等の行動療法的アプローチからすすめていき、次回までの宿題を話しあって決めた。2回目以降もすべて2人で来室した。宿題とした2人でのタッチングは、仕事の忙しさや偏頭痛を理由に進まなかったとY子は言うが、自分の練習では膣を鏡で見る事ができ、1指の練習・第1関節半分挿入可で「うれしい」と語った。この回から自律訓練を実施し、重感・温感から始めていった。3回目にはタッチングが出来たとの報告があった。4回目には、予約していた病院受診時の様子を語った。Y子は初めての内診に対する不安・恐怖が極めて強かったが、性の問題に理解ある医師とカウンセラーの励ましにより内診が出来たという。その結果、身体的異常はなかった。身体的安心感が得られたことで、Y子は行動療法におけるスマールステップを更に積み重ねていった。この後自律訓練は、心臓・呼吸・腹部・額部・性器まで順調に進んだ。また挿入練習では、Y男の1指から2指へ進み、8回目にY子は、次の段階として膣ダイレーター（細い順からA B C D）を使用しての2人での練習へ進むことを希望した。Y男によるAの練習から始め、最初は1進1退であったが、2人で試行錯誤する中12回目にはAの挿入が可能となり、更に14回目にはB、16回目にはC、17回目にはDの挿入が可能になった。18回目にはペニスの挿入練習の段階に入り（当面避妊）、19回目にはペニスの挿入・膣内射精を含むセックスが可能になったという。2人は避妊をやめることを希望した。

20回目来室時に、基礎体温が下がらない為、地元の産婦人科のクリニックを受診したとの話しがあった。その際、問診票に挿入障害の事を書いたが気付いてもららず、内診台で「足を開きなさい」といわれとても恐かったという。挿入障害の事を医師に話し、Y子の思うようには伝わらなかったものの、なんとか内診でき妊娠が判ったという。挿入障害を理解して欲しいとY子が希望し、治療者は、挿入障害についての説明とY子の経過・現状を記した産婦人科医師への紹介状を送付した。挿入障害の問題が治癒・妊娠した為、22回目の面接を最後とし約1年半に亘るカウンセリングを終了した。

8ヶ月後、Y子より以下の手紙が届いた。「送付してもらった挿入障害についての紹介状を医師を見て“必要な内診だけしましょう。産まれるときはうまれますから大丈夫”といわれ、妊娠中気持ちがとても楽になった。安産であった。育児は大変だが、子どもはとてもかわいい。自分の体験を通して、婦人科・産婦人科の中で、挿入障害についての認識が広がっていって欲しいと何度も思った。同じ悩みをもつ人にも前向きに取り組んで欲しい」と。

### 〈考察〉

挿入障害は根深い心理的問題を含むことが多く、治療は難航しやすいが、本ケースは主に行動療法で治療し治癒した。行動療法のみで解決する場合、かかえている問題が軽いとは限らない。行動療法のみで解決するか、精神療法が必要となるかを決めるのは、問題の深さではなく、夫婦関係が安定していれば、問題が根深くても行動療法のみで治ることがある。またこれと同様に大事な要因としては、挿入障害に理解ある婦人科・産婦人科医師の存在である。このような医師のもとを受診し新しい領域に踏み込む事が出来るということは、行動療法の1つの段階として大きな意味をもつ。このことにより、患者の苦悩は軽減され治癒につながりやすい。今後、Y子のような挿入障害の患者の多くが望むように、この問題の認識の広がりと、婦人科・産婦人科との更なる連携に期待したい。

# 第1回アジア・パシフィック（オセアニア）性科学学会報告

（2004年11月21～24日：インド・ムンバイ市）

ノートルダム清心女子大学 東 優子

「変わりゆく世界のセクシュアリティ（Sexuality in the changing world）」をテーマとする本大会は、アジア性科学学会（AFS）が主催する学会としては第8回に位置づけられるもので、各国からの参加者は350人を超えた。1日目の5つのワークショップを皮切りに、連日、午前の部・午後前半部・午後後半部に分かれ、10の基調講演、9つのシンポジウム、約60の一般演題（ポスター発表はなし）等が行われた。日本人による演題は11だったが、私を含め、もともとはシンポジストとして依頼されながら、シンポジウムがキャンセルとなったために一般演題に回されるというハプニングもあるなど、開会直前まで舞台裏は相当ドタバタしていたようである。しかし、会場となったインドで最高級と言われる「タージマハル・ホテル」を会場とする本大会の開会後は、IT大国の威信をアピールする技術スタッフと、温かいホスピタリティ（連日、美味しいインド料理のランチ付）に支えられて、順調に事が運んで行った。

一般演題数の少なさに対して招待講演等の占める割合が大きく、研究発表の場というよりは「研修会」的な雰囲気だったが、国際会議への参加がままならならず、世界で活躍する研究者の講演を一度にこれだけ聴くことのできる機会のなかった人々には、今回のような企画が喜ばれたと思う。一方で、インドという地で開催された大会の意義と特徴があまり感じられなかった点を残念に感じた人もいたのではないだろうか。例えば、ワークショップの講師陣と、基調講演の講師陣（J. Bancroft - 英、A. Graziottin - 伊、M. Diamond - 米、R. Green - 英、G. Adaikan - シンガポール、L. J. G. Gooren - オランダ、O. Gani & H. Caspi - イスラエル、B. Whipple - 米、A. Nehra - 米、P. Kothari - インド）の顔ぶれが重複し、西洋色が強い。また、基調講演の内容も、性障害関連が5本、IS & TSが2本と、やはり重複の感がある。講演の最後を飾った学会長 Kothari 氏による「カマストラ」以外にも、インドが世界にアピールすべきセクシュアリティの問題は山積している。インドの人口は2050年には約15億3,100万人で世界最多となると言われており、HIV/AIDS問題は、感染者数約510万人で現在南アフリカに次いで世界第2位である。そして、これらに深く関連するジェンダー格差の問題は、セクシュアリティに暗い影を落としている。基調講演というのは大会の「顔」を作るものであるだけに、こうしたテーマがなかったことはプログラム構成上の失敗と言えるのではないかとさえ感じた。

最後に、今後の性科学学会の課題であると感じた点を2つ挙げておきたい。まず、「アジア人」（特に、東南・極東アジアの女性）の存在感が希薄だという点である（同様の傾向は、他の国際会議でも指摘されている）。語学力の問題もさることながら、こうした問題は個人の努力だけで解消し得るものではなく、さまざまな方向から「工夫」を検討する必要があるだろう。2つ目は、研究における「ジェンダーの視点」の欠如である。（重要な研究主題であることには違いないが）男性の性機能障害に関する演題の多さに満腹感を覚えたという以外にも、女性のセクシュアリティを扱う研究者の視点に疑問を感じることが少なくなかった。「問題を抱えた女性」ではなく、こうした問題を生み出す社会構造それ自体を問題化する視点が不十分だったからである。性科学の発展を妨げるものは、近年、指摘されているような宗教的保守派によるバックラッシュだけではない。性科学とは一線を画するジェンダー研究やセクシュアリティ研究が、興味深い発展を遂げている事実から学ぶべき点は多いのではないだろうか。

以上、言葉足らずな部分も多いが、ご報告とさせていただく。

## First Asia Pacific Conference of Sexology 参加報告

東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース博士課程 石丸 径一郎

第1回アジアパシフィック性科学学会が、インド・ムンバイのタージマハルホテルにて開催された。

一般の口頭発表演題である scientific papers は4会場で並行して行われ、前回（2年前）のシンガポールでの大会よりも規模が大きくなっている印象を受けた。講演、シンポジウム、一般演題のテーマとしては、男女の性機能関係のもの、インドの状況や非西洋医学・神話等に関するもの、青年期の性・性教育・HIV/AIDS 関係、性同一性障害関係などが主だったものであった。“Erotic aspects of body modification” や “Sexuality Quotient (Sex Q)” などの少数派の演題にも関心を惹かれたが、発表の時間帯が重なっていたり、私の体調不良により、聞きたいもののすべてを聞くことができなかったのは残念である。

日本からは、茅島江子先生、金子和子先生、大川玲子先生、阿部輝夫先生、三隅多恵子先生、荻野員也先生、佐々木掌子先生、内山絢子先生、石丸、荒木乳根子先生、東優子先生が発表をおこなった（発表順）。また野末源一先生、波多野義郎先生、阿部先生、大川先生が座長を務められた。

今回、学会長として運営に当たったのは、精神科医の Dr. Prakash Kothari であった。“From the Land of Kamasutra” という言葉が学会のキャッチコピーになっている。カーマストラは、4世紀頃の学者ヴァーツヤーヤナによる作と言われているサンスクリット語で書かれた性愛の經典である。男女のインタークースにおける様々な体位や留意点だけでなく、オーラルセックス、同性間セックスなども網羅されているとのことである。インドでは大小さまざまな絵入りのカーマストラの本が土産物として売られていて、好評を博していた。また、Dr. Kothari の個人的コレクションかと思われるが、学会会場には展示コーナーが設けられていて、たくさんのエロチックな彫刻、絵画、絵葉書などが、人々の関心を惹いていた。この展示品に関しては、学会のウェブサイト ([www.facps.com](http://www.facps.com)) においてもその一部を見ることができる。

今回、私は（財）日本性教育協会が企画した学会参加ツアーによって渡航した。学会会場になっているホテルの宿泊でとても便利であり、またアジャンタ・エローラの石窟寺院やタージマハルの見学もすることができた。ツアーを企画していただいた畠芳夫氏に感謝申し上げたい。インドの多くの人が信仰するヒンドゥー教は、異教の神である釈迦を自分たちの神々の一人として取り込んだり、寺院に祀られているのは男根と女性器であったり、神々を描いた彫刻はたいてい踊ったりセックスしたりしていたりなど、大変カジュアルで生活感があり親しみやすい宗教であるという印象を受けた。多くの現実的な問題を抱えた国ではあるが、精神世界の豊かさは世界有数のものであろう。

今後のアジアオセアニア性科学学会は、2006年11月初頭にタイにて、また2008年には中国の北京にて開催される予定となっている。一方、世界性科学学会は2005年7月にカナダのモントリオールにて、2007年にはオーストラリアのシドニーにて開催される予定である。また2005年4月には、性同一性障害の世界学会（ハリー・ベンジャミン国際シンポ）が、イタリアのボローニャにて開催される。ぜひ多くの方が海外の学会にて活躍されることを願う。

## 平成16年度資格認定結果報告

認定委員会委員長 阿部輝夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基き、平成16年度の新規資格認定ならびに資格更新の手続きが行われました。

その結果、新規申請はありませんでしたが、セックス・カウンセラー5名、セックス・セラピスト3名の資格更新が認定されました。更新者は下記のとおりです。

セックス・カウンセラー 竹原 正輝 • 佐藤 昭雄 • 久保 洋 • 内野 英幸 • 及川 韶  
セックス・セラピスト 永井 敦 • 岩佐 厚 • 及川 韶

また、平成17年度の新規資格認定ならびに資格更新の申請も8月に予定されています（6月発行のニュースに告示）。資格認定を希望される方は、資格認定規定・更新規定を熟読の上、ご準備をお願いします。

尚、平成17年度の資格更新該当者は下記のとおりです。

セックス・カウンセラー 真名瀬由香 • 本多 洋  
セックス・セラピスト 廣井 正彦 • 真名瀬賢吾 • 米山 雅雄 • 堀口 貞夫 • 早乙女智子  
阿部 輝夫 • 松本 清一 • 野末 源一 • 矢島 通孝 • 武田 敏  
(以上敬称略、認定順)

## ご 報 告

### 新潟県中越地震への募金

昨年11月に新潟市において開催が予定され、新潟県中越地震のために止むなく中止となった「第24回日本性科学学会」は去る2月13日（日）東京都・東京慈恵会医科大学において開催されました。（前日は第6回性科学セミナー）

会場に募金箱を置き、被災者支援のための募金活動を行ったところ、40,960円が集まりましたので、日本赤十字社新潟県支部に寄付いたしました。ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

### 会費納入のお願い

4月より新しい年度（平成17年4月1日より平成18年3月31日）に入りますので、平成17年度会費15,000円の納入を、よろしくお願い致します。手数料が無料となります、学会の郵便振替用紙を同封致しますので、ご利用下さい。